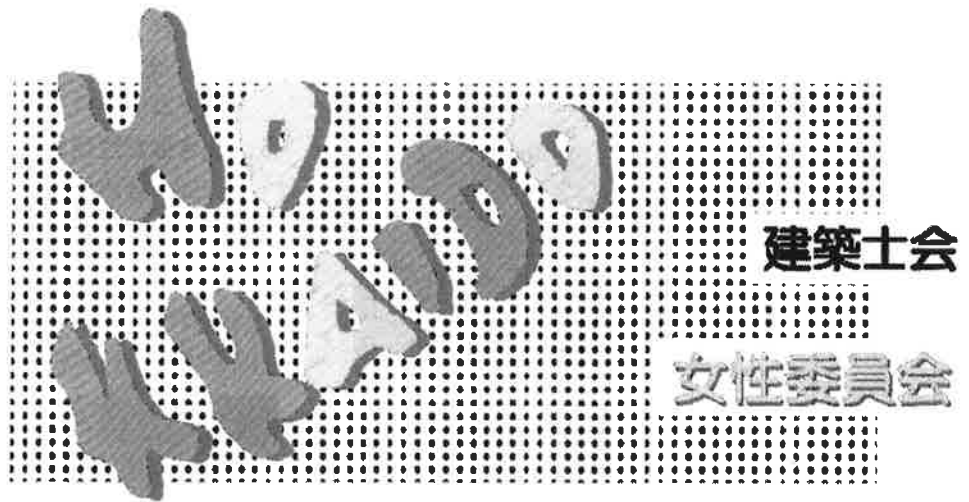


No.

39



平成20年全国女性建築士連絡協議会報告

連合会女性委員 山本 明恵

気温30度を超える東京にて、7月18、19日の二日間約340名の参加者を得、平成20年全国女性建築士連絡協議会が開催された。「地域と共生する住環境づくり」～住みかえに学ぶ～をテーマに一日目は全国から選ばれた活動報告（長野県、大阪府、山口県、福岡県）があり、その後「住みかえ」について大垣尚司氏（立命館大学大学院法学研究科教授、移住・住みかえ支援機構代表理事）の基調講演が行われた。社会情勢の変化や高齢化など様々な理由により、現在の家に住み続けられなくなった時、新たな安心、安全な暮らしを求めて住みかえを考える人が増えている。しかし、住みかえには多くのリスクがあり、それらを解決する支援体制の必要性を語られた。引き続きパネルディスカッションでは、「住みかえ事例と関係職種の連携」について、運上昌洋氏（NPO法人さっぽろ住まいのプラットフォーム理事）「空き家活用事業と支援」について、小渡佳代子氏（NPO法人横浜市まちづくりセンター理事長）「京町家情報センターのしくみと問題点」について、松井薫氏（NPO法人京町家再生研究会理事）「垂水市空き家バンク・定住促進住宅」について、美坂康人氏（鹿児島県垂水市役所企画主査）が「住みかえ」をさまざまな角度と視点からの発表と活発なディスカッションが行われた。二日目の分科会では「住みかえ」「建築をとりまく制度」「健康住宅と素材」「建築物の再生」「歴史的な建物とまちなみ」「子供と住環境」「高齢社会」「集まって住む」の8テーマで地域性を重視した建築士としての役割や女性、生活者の視点から意見交換が行われ、来年の開催（長野県）につながる有意義な会議となった。



A分科会「住みかえ」

委員長 早川 陽子

高齢化社会と地域の過疎化という、現在の日本の大きな課題をもったテーマでした。

コメンテーター小渡佳代子氏（NPO法人横浜市まちづくりセンター理事長）よりお話しがありました。

①背景 ②空き家の理由 ③事例紹介

④住まいの健康診断、住宅の手入れの必要性

その後、全国からの意見交換で印象深かったのは、「お金のない高齢者の古い家を耐震改修する為に」「耐震とバリアフリー工事の同時進行は効果的」等。

これからの時代、建築士の役割と責任はさらに広がってゆきます。他業種と連携するなど住まいづくりを総合的に提案してゆく立場にあると学びました。

B分科会「建築をとりまく制度」

旭川支部 高見 友子

福岡支部の「女性のための市民の建築大学」の活動を伺い意見交換の後、連合会の鎌田専務理事から確認申請の現状や、連合会としての動きなどの流れについてお話がありました。専攻建築士への優遇を含めて考えられているようで、公共工事等の入札時

書類へのCPD点数の表示や、確認申請時の優遇なども働きかけていくということでした。初めて参加しましたが、いろんな活動をされている全国の女性建築士の活動を知る事ができ刺激を受けました。

F分科会「子どもと環境」

旭川支部 杉山 良子

今の子どもたちにとっての「家」とは何か、子どもの成長に伴って「住みかえ」をいかに考えていくか？幅の広い課題ですすすめられました。

各地域から子どもたちが小さい時から関心が持てるよう「お菓子でつくる家」「つみ木を使って」「小学校の授業支援」「子育て世帯安心住宅」のマニュアル作りなどの活動が発表され、多くの意見交換がされました。

子ども部屋を与えプライバシーを確保し独立心を養い、しっかり勉強させるのが大事な事と考えられてきた時代から、そして今、家族の存在を近くに感じながら子どもの成長を認めてあげられる「家」づくりに変わってきているように思われます。

子どもたちが成長し独立した後、親だけの住まいとなった時、大きな家を守っていくのか、それとも子育て中の方に住んでもらえるような社会のシステム作りはできないだろうか？など女性建築士としての前向きな取り組みに励まされ、意義のある内容の分科会でした。

H分科会「集まって住む」

札幌支部 東 道尾

昨年はコメンテーターとして参加させていただきました。このテーマで取り組む女性が全国から集まっているという空気に触れて、大きな刺激を受けました。今年はどうなるのか楽しみに参加しました。コメンテーター（東京建築士会）より公開シンポジウム「家」～次代へつなぐ家の役割を考える～の報告および、講演「輸入住宅団地とコミュニティ形成」のお話がありました。時間の経過とともに周辺環境が変化するなかで自邸への想い、自然環境との関わりについてのお話を興味深く聴きました。引き続き参加者からは、

- ・実際に仕事として関わっている。
- ・このテーマで長く活動してる。
- ・自分自身の問題としてとらえ、高齢者となった時の住まい方について真剣に考えている。

などのお話が多く、前日のテーマである「住みかえ」も併せて、今後もこのテーマを継続させる意義が果たされたように感じました。

「アーツ・アンド・クラフツ展」・ 「建築家の椅子展」見学会報告

釧路支部 早田多恵子

7月13日に北海道立釧路芸術館で「ウィリアム・モリスとその時代 アーツ・アンド・クラフツ展」と同時開催の「建築家の椅子展」の見学会を行いました。アーツ・アンド・クラフツとはイギリスの詩人、思想家、デザイナーであるウィリアム・モリスが主導したデザイン運動で当時産業革命の結果、大量生産で安価な粗悪品があふれている状況を批判して、中世の手仕事に帰り、生活と芸術を統一することを主張したものです。展示作品は壁紙からリネン類、食器から家具まで幅広くあつという間の一時間でした。古い外国のお金持ちの家を見学したような感じとでも言いますか、綺麗なものを観て癒される豊かな気持ちと羨望のため息が漏れました。



「建築家の椅子展」は旭川の東海大学芸術工学部の織田憲嗣教授のコレクションをお借りしていたため残念ながら実際に座ることは出来ませんでしたが25個、25名の建築家の設計した椅子を見る機会に恵まれ百聞は一見に…ですね。勉強になりました。



子どもをはぐくむ住まいづくり セミナー in 江別

札幌支部 新海 直美

平成20年7月31日、北海道江別高等学校にて、高校の家庭科を受け持つ先生を対象にしたセミナーを開催しました。

きっかけとなったのは、2006年に女性委員会で作成・発行された「子どもをはぐくむ住まいづくり」。この冊子を目にされた先生より「子どもをはぐくむ」という視点が面白い、ということでお声掛けを頂いたようです。

この時期、北海道の家庭科の先生方による協議会の研修会が開催されており、その分科会の1つがこのセミナーでした。当日は、全員が女性の23名の先生方に参加頂き、それはそれは華やかなセミナーとなりました(笑)。

セミナーは講話とワークショップの2部構成で進められました。

■セミナー「あそびの世界からみた家づくり」

道央支部の工藤美智子さんが講師になり、1時間ほどの講演をされました。自身の子育て体験と建築士という視点から、社宅の頃のお話、新築を設計した際に注意したことなどをざっくばらんにお話頂きました。お子さんの写真やユーモラスなエピソードなどで、会場から笑いが起こるなど、とても和やかなセミナーとなりました。



【左：講師の工藤美智子さん】

【右：質問をする先生。とても真剣です！】

■ワークショップ「家族が囲む・集う場づくり」

10分ほどの休憩後、机の形態を変え、5グループに分かれてワークショップを行いました。

「子供にとっての住まいって何だろう？」という

ことを考えて頂くために、自分の小学校6年生位を思い出して頂いた上で、下記の3つの質問を先生方に投げ掛け、ポストイットに書いて頂きました。

- ① 子供の頃居心地の良かった場所は？
- ② 逆に居心地の悪かった場所は？
- ③ 家族との団らんの場所は？

ぱっと記入される方、じっくりと記憶を辿る方、思いつき方は様々ですが、

「お母さんがいるキッチンが好きだった」

「暗くて遠いトイレやお風呂が嫌いだった」

「暖房のある居間にみんな集まっていた」

等、時代や住んでいた間取りや地域が違って共通する意見から、

「人が行き来する階段が好きだった」

「縁側での、近所の人との団らんが好きだった」

等と、個性や時代を感じるエピソードもあり、それぞれ子供時代に思いを馳せながら進められました。

全体をまとめてみると、いつの時代にも変わらない子供の思いというのがあり、それを取り入れたビジョンのある住まいづくりを考えて行かなければならない、という共通の認識を持てたのが大きな成果だったように思いました。



【ワークショップの様子】

意見交換をする中、「住まい」という専門性の強い分野に重要性を感じ、どのように伝えて行くべきかを悩んでいる先生方の姿を見て、建築側も、もっとすべきことがあるのではないかと、考えさせられる場面も多々ありました。先生方や、また、子供たちへの向けて、このような機会がもっと必要なのではないかと思いました。